

第10回 総合

◆次の文章をしっかりと音読してから、後の問いに答えなさい。

父の死後、主人公は兄と長年仕えていた下女の清との三人でくらししていたが、兄が九州に行くことになったので、家と財産とを処分することになり、清は甥のもとに行き、主人公は下宿に移った。

九州へ立つ二日まえ、兄が下宿へ来て金を六百円だして、これを資本にして商売をするなり、学資にして勉強をするなり、どうしても随意に使うがいい、そのかわり、あとはかまわないと言った。兄には感心なやり方だ。なんの六百円ぐらいもらわんでもこまりはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊な処置が気に入ったから、礼を言つてもらつておいた。兄はそれから五十円出して、これをついでに清に渡してくれと言つたから、異議なくひきうけた。二日たつて新橋の停車場でわかれたきり、兄にはその後いっぺんもあわない。

おれは六百円の用法について、寝ながら考えた。商売をしたつて、めんどくさくつてうまくできるものじゃなし、ことに六百円の金で商売らしい商売がやれるわけでもなからう。

よしやれるとしても、今のようじゃ人の前へ出て教育を受けたといばれないから、つまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割つて、一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強ができる。

三年間一生けんめいにやれば、何かできる。それからどこの学校へはいろいろと考えたが、学問は生来どれもこれも好きでない。ことに語

15

10

5

学とか文学とかいうものはまっぴらごめんだ。新体詩などときては、二十行あるうちで一行もわからない。どうせきれいなものなら、何をやっても同じことだと思つたが、さいわい物理学校の前を通りかかったら生徒募集の広告が出ていたから、なにも縁だと思つて規則書をもらつて、すぐ入学の手続きをしてみた。いま考えると、これも親ゆずりの無鉄砲から起こつた失策だ。

三年間、まあ人なりに勉強はしたが、べつだんたちのいいほうでもないから、席順はいつでも下から勘定するほうが便利であつた。しかし不思議なもので、三年たつたらとうとう卒業してしまつた。自分でもおかしいと思つたが、苦情をいうわけもないからおとなしく卒業しておいた。

卒業してから八日目に校長がよびに来たから、何か用だろうと思つて、出かけていいたら、四国へんのある中学校で数学の教師がいる。月給は四十円だが、行つてはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが、じつをいうと教師になる気も、いなかへ行く考えも何もなかつた。もっとも教師以外に何をしようというあてもなかつたから、この相談を受けた時、行きましよう、即席に返事をした。これも親ゆずりの無鉄砲がたつたのである。

ひきうけた以上は赴任せねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居して、小言はただの一度も聞いたことがない。けんかもせずすんだ。おれの生涯のうちでは比較的のんきな時節であつた。しかしこうなる、四畳半もひき払わなければならぬ。生まれてから東京以外にふみ出したのは、同級生といつしよに鎌倉へ遠足した時ばかりである。こゝんどは鎌倉どころではない。たいへんな遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で、針の先ほど小さく見える。どうせろくな所ではある

40

35

30

まい。どんな町で、どんな人が住んでるかわからん。わからんでもこまらない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もつとも少々めんどくさい。

45

家をたたくでも、清の所へはおりに行った。清の甥というの
は、^③存外けっこうな人である。おれが行くたびに、おりさえすれば、
なにくれともてなしてくれ。清はおれを前へおいて、いろいろおれ
の自慢を甥にきかせた。いまに学校を卒業すると、麹町へんへ屋敷を
買って、役所へかよふのだなどと吹聴したこともある。ひとりできめ
てひとりでしゃべるから、こっちはこまって顔を赤くした。それも一
度や二度ではない。おりおりおれが小さい時、寝小便をしたことまで
もちだすには閉口した。

50

甥はなんと思つて清の自慢を聞いていたかわからぬ。ただ清は、昔
ふうの女だから、自分とおれの関係を封建時代の主従のように考えて
いた。自分の主人なら甥のためにも主人に相違ないと合点したものでら
しい。甥こそ[※]いつらの皮だ。

55

いよいよ約束がきまつて、もう立つという三日まえに清をたずねた
ら、北向きの三畳に客座を引いて寝ていた。おれの来たのを見て起き
直るが早いか、坊っちゃん、いつ家をお持ちなさいますと聞いた。卒
業さえすれば、金がいぜんとポケットの中にわいてくると思っている。
そんなにえらい人をつまえて、まだ坊っちゃんといふのはいよいよ
ばかげている。おれは単純に、当分うちは持たない。いなかへ行くん
だと言ったら、非常に失望したようすで、[※]ごま塩のびんの乱れをし
きりになてた。あまり気の毒だから、

60

「行くことは行くが、じき帰る。来年の夏休みにはきつと帰る」
となくさめてやった。それでも^④みような顔をしているから、

「何をみやげに買ってきてやろう、何がほしい」

と聞いてみたら、

「越後の笹飴が食べたい」

と言った。越後の笹飴なんて聞いたこともない。第一、方角がちが
う。

70

「おれの行くいなかには、笹飴はなさそうだ」

と言つて聞かしたら、

「そんなら、どっちの見当です」

と聞き返した。

75

「西のほうだよ」

と言つと、

「箱根のさきですか、手前ですか」

と問う。ずいぶんもてあました。

80

出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来るとちゅう小
間物屋で買ってきた歯みがきと、ようじと、手ぬぐいをズックのかば
んに入れてくれた。そんな物はいらなと言つても、なかなか承知し
ない。[※]車をならべて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た
時、車へ乗りこんだおれの顔をじつと見て、

85

「もうお別れになるかもしれません。ずいぶんごきげんよう」

と小さな声で言った。目に涙が^{よだ}いっぱいたまっている。しかし、も
うすこしで泣くところであつた。

汽車がよつぽど動きだしてから、もうだじょうぶだろうと思つて、
窓から首をだして、ふりむいたら、やっぱり立っていた。^⑤なんだか
たいへん小さく見えた。

90

(夏目漱石「坊っちゃん」より)

※ 随意……じぶんの心のまま。

※ 淡泊な……さっぱりした。欲深くない。

※ 物理学校……現在の東京理科大学。進級、卒業のむずかしい学校として有名であった。

※ 蟄居……ここでは、一人でおとなしくしていたことをユーモラスに表現したもの。

※ いいつらの皮だ……いい迷惑だ。

※ ごま塩のびん……白髪交じりの側頭部の髪。

※ 車……人力車のこと。

※ 車へ乗りこんだ……汽車の車両へ乗りこんだ。

問一 —— 線①「兄にしては感心なやり方だ」とありますが、

1 どのようなことに対して感心したのですか。五十字以内で答えなさい。

2 「兄にしては」とありますが、それまでの兄と「おれ」との兄弟仲はどうであったと考えられますか。この文章から読み取れることを三十字以内で答えなさい。

問二 —— 線②「おれは三年間学問はしたが、じつをいうと教師にな

る気も、いなかへ行く考えも何もなかった」とありますが、なぜ学問をすることにしたのですか。文章中の言葉を使って、七十文字以内で答えなさい。

問三 —— 線③「存外けっこうな人である」とは、「思いの外気立て

のいい人である」という意味ですが、清の甥の気立てのよさはどんなところに表れていますか。六十字以内で答えなさい。

問四 —— 線④「みような顔をしている」とありますが、「みような顔

から感じ取れるこのときの清の様子を六十五字以内で説明しなさい。

問五 —— 線⑤「なんだかたいへん小さく見えた」とありますが、清

が「なんだかたいへん小さく見えた」のはなぜですか。このときの「清」や「おれ」の気持ちも入れて説明しなさい。